

『北京官話全編』の談話分析 「辞去」の場面を中心に

石 崎 博 志

はじめに

ポライトネス理論による言語戦略の研究は、実際の発話やドラマ・映画などの台詞をコーパスとする。尊敬語や謙譲語などの文法カテゴリーがない中国語では、語彙的な手段を用いる、あるいは表現そのものを変える、配慮の表現を複数組み合わせるなどの手段で丁寧さを表す¹⁾。現代語の談話分析は、存命母語話者の言語行動を観察することでその妥当性を検証することができるが、言語戦略の歴史的研究は存命話者の不在と資料の制限から歴史を遡るほど不明な点が多くなる。

『北京官話全編』（以下『全』と略称）は中国大陸を中心に活動した外交官・深澤暹（1876-1944）による378章からなる北京官話テキストである。『全』は378章ものエピソードが収録され、豊富な語料が得られる貴重な資料である。本稿は語用論を用いて『全』に反映された清末の官話を分析する。とりわけ『全』は辞去の場面を数多く含むため、手始めに辞去者と送り手による別れ際の言語行動を中心に考察し、当時の言語戦略の一端を明らかにしたい。

また本稿で『全』を扱うのは別の理由がある。一般に外国語の運用には、母語からの転移が生じ、それは発音、語彙、文法といったレベルから、文の組み立てなど談話の構成にもおよぶ。つまり母語の言語習慣からの影響で外国語の言語習慣にない表現を使用してしまふ、あるいは習慣的に不可

欠な言葉を省略してしまうことが起こり得る²⁾。こうした母語からの「転移」は熟達した話者にも不可避である。深澤は外交官であり³⁾、『全』の編纂には外交官に相応しい北京官話を意識したと推察されるが、『全』で展開されているやりとりが、純粹に漢語話者によるものの再現であるのか、それとも日本語話者・深澤の言語転移が混入されたものなのかは、官話資料の性質を考えるうえで検討に値する問題である。本稿に先立つ研究として、奥村佳代子（2018）は「二人称は、“您”と“你”、“您”と“您”のパターンがあり、互いが“您”を用いる場合がより多い」と指摘した上で、「“大哥”“老兄”“大叔”に対しては“您”を用い、“小弟”“老弟”に対しては“你”又は“您”を用いている」、さらに「年齢や立場等の上下関係が示されていない場合の多くは、互いに“您”を用いている」ことを指摘する。そして内田慶市（2018）が指摘するように、清代の『紅樓夢』や『兒女英雄伝』、『清文指要』などの満漢合璧資料にも“您”が現れないことに加え、現代の母語話者の親しい間柄における“您”の使用頻度を考慮すると、『全』は極端なほど“您”が多用されていると見なせよう。こうした二人称で丁寧な表現を選ぶ配慮がみられる⁴⁾ことは、目上か目下かによって相手の呼び方を厳密に使い分ける日本語からの言語転移を感じさせる状況である。これは日本語話者による中国語資料を利用して往事の中国語使用の実態をどの程度再現できるか、という問題につながる。官話資料編纂の背後には、中国語母語話者による有形無形の貢献があったと考えられるが、その程度がいかにほかは個々の資料を精査する必要がある、官話資料の編者の多くが、非中国語母語話者である以上、この問題はある程度クリアにする必要がある。よって本稿では『全』の辞去場面を分析することで、『全』に日本語から語用論的転移が観られるかも考えたい。

2 分析対象と方法

本稿では内田慶市（2017）を底本とし、『全』の全エピソードを分析対

象とし、どのようなタイミングで辞去の場面に移るのかも含め、辞去の対話が展開する箇所を中心に分析する。

杉村孝夫（2012）は日本語の大分方言で展開される辞去場面の談話分析を通時的に行ったものだが、辞去場面に展開される言説を内容別に分類している。本稿ではその枠組みを基礎に〈きっかけ〉、〈感嘆詞の使用〉、〈時間への言及〉、〈辞去の理由〉、〈辞去の表明〉、〈引き留め〉、〈引き留めの理由〉、〈辞去の容認〉、〈家族への伝言〉、〈帰途の注意〉、〈訪問への言及〉、〈待遇への言及〉、〈再会の提案〉、〈再会の容認〉、〈見送りの提案〉、〈見送りの辞退〉、〈別れの挨拶〉、〈その他〉に分けて考察する。

そのうえでどのような文脈で上記の内容に言及するのかを観察することで、辞去を切り出すタイミングについても考察する。

3 辞去場面の典型的表現

本章は、辞去場面の言説を、辞去者と送り手に分けて考察する。まず本稿の原文の提示方法を、2人の対話を記述する第14章を例に説明する。第14章は『全』の辞去場面における典型的なやりとりが展開されており、かつ辞去の場面における各種の言語戦略が展開されているエピソードである。

第14章

17AY：哎哟，了不得了，天不早了。我也该走了。〈感嘆詞の使用〉〈時間への言及〉〈辞去の表明〉

18BO：忙甚麼？再坐一會子罷。〈引き留め〉

19AY：不坐着了。改日再談罷。〈辞去の表明（再）〉〈再会の提案〉

20BO：那麼我也不强留了。沒事的時候兒不妨常來談談。〈辞去の容認〉
〈再会の提案〉

21AY：是。改日見。〈その他〉〈別れの挨拶〉

22BO：請了、請了。〈別れの挨拶〉

23AY：您留步、別送，別送。〈見送りの辞退〉

24BO：請請。（完）〈別れの挨拶〉

まず形式面から説明をする。台詞の冒頭の数字は原文の漢数字の文番号をアラビア数字に置き換えたものである。本稿では A を辞去者とし、B を送り手とする。そして両者の上下関係が文脈で判断可能な場合、年上 - 目上を O (Older) とし、年下 - 目下を Y (Younger) と表示するが⁵⁾、両者の上下関係が必ずしも明確ではない場合は O / Y を表示しない。つまり、上の原文は、台詞番号が「十七」であり、かつ辞去者が年下なので「17AY」と表記し、台詞番号が「十八」で、送り手が年上であるので「18BO」としている。そして引用された部分はその章の最後の場合は、最後の台詞の末尾に（完）を記し、途中の対話を省略して引用する場合は省略箇所（中略）と記す。

内容に関する注記は、原文の後ろに〈辞去の表明〉や〈引き留め〉といった言説の内容を記している。第 14 章の終盤は、話が落着する、あるいは次の約束が定まるといった流れとはならないケースである⁶⁾。ここでは“哎喲”といった〈感嘆詞の使用〉が唐突になされ、“天不早了”といった〈時間への言及〉がなされた後に辞去者 A により“我也該走了”といった〈辞去の表明〉がなされる。こうした流れは第 14 章に限ったことではなく、数多くのエピソードで同様のパターンが観られる。

次に送り手 B はかなりの確率で“忙甚麼？再坐一會子罷。”といった〈引き留め〉の言説で応じる。このエピソードでは辞去者が送り手の〈引き留め〉を受けてもとどまることはなく、“不坐着了”と改めて〈辞去の表明〉が示される。

その後辞去者からの〈再会の提案〉を受けて、送り手から“那麼我也不强留了”という〈辞去の容認〉が行われ、引き続き〈再会の提案〉が行われる。

その後は、“請了、請了”といった〈別れの挨拶〉、“您留步、別送”という〈見送りの辞退〉、“請、請”という〈別れの挨拶〉といった常套的なやりとりが展開される。

このように辞去の場面では両者の間で複数ターンが展開され、〈きっかけ〉を含めると辞去場面に紙幅が割かれていることが分かる。以下は辞去の場面を時系列に序盤・中盤・終盤に分け、そこで展開される言語戦略を示したものである。

表1 辞去場面の言語戦略

	辞去者 A	送り手 B
序盤	〈感嘆詞の使用〉 〈時間への言及〉 〈辞去の表明〉	〈引き留め〉 〈引き留めの理由〉
中盤	〈再会の提案〉 〈辞去の理由〉	〈再会の提案〉 〈辞去の容認〉
終盤	〈見送りの辞退〉 〈別れの挨拶〉	〈見送りの提案〉 〈別れの挨拶〉

このように辞去の場面が展開されるが、後述のように送り手から直接的に辞去を促す言説がなされることは稀で、また辞去の場面があるエピソードではどこかで何らかの形で〈再会の提案〉が含まれることが多い。

3.1 辞去者の表現

ここでは辞去における辞去者の言語戦略について考察する。辞去者の発話は〈きっかけ〉、〈時間への言及〉、〈辞去の理由〉、〈辞去の表明〉、〈家族への伝言〉、〈待遇への言及〉、〈再会の提案〉、〈別れの挨拶〉、〈その他〉に分類して考察する。辞去場面を辞去者の視点から3段階に分けると以下の流れとなる。

序盤：〈きっかけ〉、〈辞去の表明〉

中盤：〈辞去の理由〉、〈再会の提案〉

終盤：〈見送りの辞退〉、〈別れの挨拶〉

〈きっかけ〉は概ね〈辞去の表明〉に至るまでの話の流れ全体を指すが、次節以降に辞去者の言語戦略を実例もって説明する。

3.1.1 〈きっかけ〉と〈辞去の表明〉

辞去者が、どのような流れで辞去の表明を行うかは、一定のパターンが観られる。それは辞去到いたる前の段階で、両者の話が落ち着いた場合や、再来や再会の約束がまとまる時であり、本稿ではこれらを〈きっかけ〉に分類している。そして、何らかの〈きっかけ〉のあとに、辞去者から以下の〈辞去の表明〉が発せられる。

“我也不坐着了” “我告辞了”
“我也該走了” “我該回去了”
“得家去了” “要告假了。”

この辞去者による再度の〈辞去の表明〉は、送り手にとっては FTA (Face Threatening Act) と言えるが⁷⁾、多くの場合、これに加えて“改日再談罷”といった〈再会の提案〉というポライトネス・ストラテジーがとられる⁸⁾。

現代日本語の辞去行動においては、行動を動詞として言語化することを避ける場合があり、「ではそろそろ」や「それじゃあ」とのみ言って〈辞去の表明〉がなされることもある。だが『全』では明確に“告辞”“告假”“走”“回去”といった動詞を使った表現をしている。こうした〈辞去の表明〉の前後には、〈時間への言及〉が観られる。

“天不早了” “天已經十二鐘了”
“現在已經正午兩刻了”

このような時間への言及は、杉村孝夫（2012）においては〈辞去の理由 1〉に分類されているが、やはり日本語でも辞去への呼び水となっている。時間への言及は、辞去のタイミングの「正当性」を示すもので、辞去という FTA を多少とも和らげる言語ストラテジーの一つと言える。

3.1.2 談話標識としての感嘆詞

『全』においては、前節で観られるような〈きっかけ〉がない場合は、唐突に感嘆詞の“哎喲”や“哎呀”、または“喲”が発せられる場合も数多く観られる⁹⁾。

第 32 章¹⁰⁾

31AO：您説的是。哎喲，僂們只顧講論人家的事，鬧的天這早晚兒了。

我該走了。〈感嘆詞の使用〉〈時間への言及〉〈辞去の表明〉

32BY：您忙甚麼？再談一會兒罷。〈引き留め〉

33AO：我還有約會兒哪，不坐着了。可是我纔託您的事，您千萬在心。

〈(再度の) 辞去の表明〉〈その他〉

34BY：是是，我必盡心的。您回去了，改日見。〈辞去の容認〉〈別れの挨拶〉

35AO：是，改日見。(完) 〈別れの挨拶〉

第 53 章

11AY：那好極了。喲，不早了，天已經正午了，我還要出城哪，僂們改日再談罷。〈感嘆詞の使用〉〈時間への言及〉〈辞去の理由(間接的な辞去の表明)〉〈再会の提案〉

12BO：你再坐一會兒罷，何必這麼忙。〈引き留め〉

13AY：不坐着了，一半天見。〈辞去の表明〉〈再会の提案〉

14BO：一定要走，那麼僂們一半天見。(完) 〈辞去の容認〉〈別れの挨拶〉

第 32 章の“哎喲”や第 53 章の“喲”は、驚きや何かに気付いた時の感情の動きが漏れ出したものだが、談話においてはそれまでの流れを止める〈話題の転換〉や〈辞去の表明〉を作る役割を担っている。これは『全』で

はたびたび観られ、典型的な方法であるとさえ言える。

3.1.3 〈辞去の理由〉と〈再会の提案〉

辞去場面においては、辞去者から何らかの〈辞去の理由〉が語られることが殆どである。これは〈辞去の表明〉の直前や直後に説明される場合と、送り手の〈引き留め〉に応じて説明されるパターンがある。〈辞去の理由〉が明確に述べられないケースでも、必ず〈再会の提案〉がなされる。それを如実に表す第73章のやりとりを観てみよう。なおこのエピソードでは両者の上下関係は明確ではない。

第73章

14B：是的，我半天就給舍親寫信寄去，勸勸他，叫他不要急躁。

15A：很好，您就這麼辦吧。我也不坐着了。〈きっかけ〉〈辞去の表明〉

16B：忙甚麼？〈引き留め〉

17A：我還有事哪。僭們改日見。〈辞去の理由〉〈再会の提案〉

18B：那麼我也不強留了，一半天見。(完)〈辞去の容認〉〈別れの挨拶〉

上のやりとりでは〈辞去の理由〉は“我還有事哪。”と曖昧になされるが、その直後に“僭們改日見。”とすかさず〈再会の提案〉がなされる。また辞去の場面において送り手の〈引き留め〉がより強く行われた場合は、〈辞去の理由〉か〈再会の提案〉は不可欠な要素となるが、以下の第120章の辞去場面は〈辞去の理由〉をより具体的に述べている。

第120章

AO：天不早了。我得回去了。(時間への言及)〈辞去の表明〉

BY：您忙什麼呢？輕易不見，多談會子罷。〈引き留め〉〈引き留めの理由〉

AO：我是有個約會兒，就是纔提的。從廣東回來的這位朋友。我們今兒在前門吃飯。僭們改日再見罷。〈辞去の理由〉〈再会の提案〉
BY：那麼我就不留了。(完)〈辞去の容認〉

この場面では、送り手の〈引き留め〉に対し、辞去の理由を“從廣東回來的這位朋友。我們今兒在前門吃飯。”と具体的に述べた上で、“僭們改日再見罷”と再会の提案をしている。そもそも他人のもとから辞去する行為や〈引き留め〉に反して去る行為は、相手に不快感を与える危険性があり、これは相手のフェイスを脅かす行為（FTA）であるといえる¹¹⁾。辞去の場面で〈辞去の理由〉を具体的に相手に明示することは、FTAを軽減する意味合いをもち、ポライトネス理論に照らせば、具体的な〈辞去の理由〉を挙げることは、より丁寧度が高い言語行動であったと考えられる。これに関して、現代における日中の断りの理由に関する対照研究を行った蒙楡（2010）は以下のように述べる。

「日本人社員が用いる {理由} というポジティブ・ポライトネス・ストラテジーは内容が曖昧であるのに対して、中国人社員の用いる {理由} は具体的で種類が多い。」

さらに現代中国語と現代日本語の対照研究を行った王源・山本裕子（2015）は、中国語話者が〈断り〉の言語行動を行う時にもっとも重視しているのは〈理由説明〉であるとする。王源・山本裕子（2015）が取り扱っている場面と『全』の辞去場面は異なるものの、辞去の場面において辞去者がもっとも配慮しているのは〈辞去の理由〉と〈再会の提案〉であり、これは19世紀以降から変化がない要素であることを示している。

そして辞去の場面で多く使用されるのは、〈再会の提案〉である。例えば以下のようなものが挙げられる。

“明兒還是我來罷” “僂們明兒見罷”

“一半天見罷” “僂們三兩天見”

この〈再会の提案〉はいわば、代案の提示であり、これはポジティブ・ポライトネス・ストラテジーに分類される言説である。これも断りのストラテジーと類似する要素である。ただ“改日”という曖昧な提示の場合と、“明天”といった具体的な提示でポライトネスの度合いは異なるものと考えられる。

3.1.4 〈見送りの辞退〉と〈別れの挨拶〉

辞去者の終盤は主に〈見送りの辞退〉と〈別れの挨拶〉からなる。

〈見送りの辞退〉には以下のものがある。

“您留步罷” “您別送了”

“您請回、別送”

また〈別れの挨拶〉には以下のものがあるが、典型的には“[時間詞]+見罷”が使われる。

“明兒見” “一半天見罷”

“改日見” “僂們明兒見罷”

それ以外には以下のような、高い敬意を示したものがある。

“磕頭了”

“磕頭磕頭”

これは相手が高位の立場にあることを示しており、両者の関係性を考える際の手がかりとなる。

3.1.5 辞去者の〈別れの挨拶〉

辞去者による〈別れの挨拶〉には、第33章の25Aの下線部に観られるように相手の〈別れの挨拶〉に対してオウム返しにするパターンが多用される。その多くは〈再会の提案〉に関わる事が多く、“[時間詞]+見”の形式をとる。

第 33 章

20B：好極了。我如果考書院的時候兒必來約您同去。〈きっかけ〉

21A：我不坐着了。該走了。〈辞去の表明〉

22B：您這時候兒還上那兒去？〈引き留め〉

23A：我也到我們舍親那兒。〈辞去の理由〉

24B：三兩天見罷。〈別れの挨拶〉

25A：是三兩天見。〈別れの挨拶〉

ここまでみてきたように、辞去者の発言には、日本の大分方言を分析した杉村孝夫（2012）と比較すると、送り手の〈家族への伝言〉、〈待遇への言及〉という要素がない。

3.2 送り手の表現

ここでは送り手の言語戦略について考察する。辞去における送り手の発言を〈きっかけ〉、〈引き留め〉、〈帰途の注意〉、〈訪問への言及〉、〈再会の提案〉、〈別れの挨拶〉、〈その他〉に分類し、辞去場面を3段階に分けると以下の流れとなる。

序盤：〈きっかけ〉、〈引き留め〉、〈引き留めの理由〉

中盤：〈辞去の容認〉、〈再会の提案〉

終盤：〈別れの挨拶〉

次節以降に送り手の言語戦略を実例でもって説明するが、日本の大分方言を分析した杉村孝夫（2012）と比較すると、送り手の発言には〈帰途の注意〉、〈訪問への言及〉という要素がない。

3.2.1 引き留めの方策

送り手による引き留めにはいくつかの方策がとられる。“忙什么？”が最も典型的な引き留めの言説である。

第 32 章

您忙甚麼？再談一會兒罷。〈引き留めの理由〉

第 33 章

您這時候兒還上那兒去？〈引き留め〉

次の約束が行われていないという状況で、辞去者から〈辞去の表明〉が行われた場合、〈引き留め〉は送り手が必ず行う言語行動と言える。両者が友好的な関係にあるにもかかわらず、ごくまれに〈引き留め〉が入らない場合があるが、それは次の約束がすでに決まっている場合が多い。

しかし、例外的なエピソードもある。第 220 章のように、両者がケンカ別れするエピソードは、辞去者 A は送り手 B の怒りをなだめるも送り手の怒りが収まらない流れであるが、送り手 B から“快去罷”と辞去を促す発言がなされている。

第 220 章

6A：哎呀、你真生了氣了嗎？我纔是和你是鬧着玩兒的話、你想僭們倆的交情、如同親弟兄一樣。就是偶然誰有觸怒誰的地方兒、也都恕得過去。你怎麼真生氣了呢。別着急、我底下再不這麼和你說玩兒話了。如果後來我再要如此、你就咒罵我。

7B：你瞧你這個人、打一巴掌揉一揉、可叫我怎麼好。得了、幹你的事情去罷！

8A：就是你也別生氣了、也別皺眉了。抽烟罷、我給你裝一袋謝謝罪。

9B：快去罷！別胡鬧了！

10A：那麼明兒見。(完)〈再会の提案（辞去の挨拶）〉

発言 9B に観られるように送り手が直接辞去を求めるのは『全』でも異

例で、さらに“別胡鬧了”とその理由も付け加えており、この発言は敬意とは対極にある¹²⁾。この章では〈引き留め〉は行われず、辞去者から“那麼明兒見。”と具体的な再会日を明示されても、送り手はそれに応えぬままエピソードは終了する。仮にBが最後に“明兒見!”と言ったなら、笑い話のオチになるが、そうはならない。

他の友好的な辞去場面ではAとBのターン数も多く、次節にみるように発言の繰り返しを観られるが、険悪な場面ではAとBのターンが極端に少なく、かつ発言の繰り返しも観られない。これは辞去場面のポライトネスの特徴を象徴的に示す対比であろう。

3.2.2 辞去の容認

送り手の言説として、現代日本語にあまり観られないのは、本稿で〈辞去の容認〉に分類した言説である。これは典型的には送り手の〈引き留め〉と辞去者の〈辞去の理由〉を受けた後になされるもので、“那麼我就不强留了”がよく使われる。以下では16Bがそれに相当する。

第108章

13A：哎呀，您也該歇歇兒了，別僅自强打精神坐着，招呼累大發了，我得走了。〈感嘆詞の使用〉〈辞去の理由〉〈辞去の表明〉

14B：不乏不乏，您再坐一會兒罷。〈その他〉〈引き留め〉

15A：不坐着了，明兒我再瞧您來。〈辞去の表明〉〈再会の提案〉

16B：那麼我就不强留了。〈辞去の容認〉

17A：您別送了，外頭風大。〈見送りの辞退〉

18B：那麼我就遵命不送了。〈その他〉

19A：您請便。(完)〈別れの挨拶〉

この“那麼我也不强留了”は「それなら私も無理には引き留めませんよ」

という意味であるが、この〈辞去の容認〉に相当するのが、以下にみるような“你不坐着了”と相手の帰る行動をそのまま口にし、確認する言説である。

第 42 章

24BO：是了。我明兒要是車寫妥了，明兒晚上就給你送信去。

25AY：我聽您信，我也不坐着了。趁工夫還得到幾家兒。〈辞去の表明〉
〈辞去の理由〉

26BO：你不坐着了，那麼明兒晚上見。(完) 〈辞去の容認〉 〈別れの挨拶〉

これらの例に観られるように、“你不坐着了，那麼+〈再会の提案〉”になることが多い。例えば、“你不坐着了，那麼一半天見。”は日本語にそのまま訳出すると、「お帰りになるなら、一兩日中にお会いしましょう」となる。日本語のニュアンスでは条件節の“你不坐着了”の箇所はやや不自然であるが、この場合は友好的な場面で使われ、使われる頻度も少なくないため、当時の北京官話においては一般的なやりとりであると考えられる。いずれにせよ日本語のやりとりにおいて、“你不坐着了”という「帰るのですね」、「帰るのだったら」といった言説がなされた場合、辞去到何らかのネガティブな心情を吐露することとなると思われる。とりわけ上記の第 175 章の発言にある副詞“實在”は、日本語表現として訳出すると大きな違和感を伴う。

3.2.3 お茶と辞去

〈辞去の表明〉は通常、辞去者からなされる。しかし、送り手の発言によって結果的に〈辞去の表明〉が引き出される場面も存在する。典型的にはエピソード終盤で送り手がお茶をすすめた場合、それを呼び水として辞去

者の〈辞去の表明〉がなされるケースがある。それを第8章と第46章でみていこう。

第8章

30BO：老弟，請喝茶罷。恐怕涼了，就不好了。〈お茶への言及〉

31AY：我也不喝了，要告假了。〈辞去の表明〉

32BO：忙甚麼？再談一會兒罷。〈引き留め〉〈引き留めの理由〉

33AY：是改日再来。請安。〈再会の提案〉

34BO：那麼我也不强留了。改日我過去道喜。〈辞去の容認〉

35AY：不敢當。留步，留步。(完)〈その他〉〈見送りの辞退〉

第46章

22AY：這宗帳很不難算。最難的是他們糧行的帳、要是算法不精、斷不能算。

23BO：是不錯的。老弟請喝碗茶歇歇兒罷。〈お茶への言及〉

24AY：不喝了。天不早了、該回去了。〈時間への言及〉〈辞去の表明〉

25BO：忙甚麼？再坐一會兒。〈引き留め〉〈引き留めの理由〉

26AY：不坐着了。怕是太晚了、車不好僱了。〈辞去の表明〉〈辞去の理由〉

27BO：那麼你稍坐一坐兒、等我叫人到車口兒上給你僱去。〈引き留め〉

28AY：不用了、我自己走着僱罷。僭們一半天兒見。〈その他〉〈再会の提案〉

29BO：老弟實在不坐着了、那麼我就不强留了。〈辞去の容認〉

30AY：您別送。〈見送りの辞退〉

31BO：請請。(完)〈別れの挨拶〉

この第8章では30BOで、第46章では23BOで年上の送り手からお茶を

すすめる台詞が発せられる。そして、その直後に辞去者がお茶を断る流れで〈辞去の表明〉がなされている。『全』では送り手が辞去を促す常套句がなく、そのなかで唯一、送り手が辞去への流れを「能動的」に形作る言説である。こうしたお茶→辞去が成立する状況に共通するのは、「わざわざ」お茶をすすめる言説が常に年長者からなされることであり、その逆は観られないことである。

3.2.4 送り手による〈別れの挨拶〉

送り手による〈別れの挨拶〉には大きく分けて2つのパターンがある。一つは辞去者が言ったことをオウム返しにするパターンと、もう一つは“請了。請了。”という常套句を使うパターンである。まずオウム返しのパターンを挙げる。

第17章

21BO：勞老弟的駕罷。

22AY：該當的。您別送。僇們三兩見。〈別れの挨拶〉

23BO：三兩天見。〈別れの挨拶〉

もう一つの辞去を促すパターンは以下のように〈見送りの辞退〉に対して“請，請”あるいは“請了，請了”などと応答するものである。

第131章

14AO：是，天不早了，我得走了。〈時間への言及〉〈辞去の表明〉

15BY：作甚麼這麼忙？〈引き留め〉

16AO：我還有事情哪，是因為我們舍親，新解外頭回來，我今兒請他吃飯，給他接風，去晚了不像事。〈辞去の理由〉

17BY：那麼我就不留了。〈辞去の容認〉

18AO：別送、別送。〈見送りの辞退〉

19BY：請了、請了。〈別れの挨拶〉

“請了、請了。”は「どうぞ、どうぞ」と直訳され、恐らく何らかの動作を伴って発せられると考えられるが、こうした内容は少なくとも日本語での応答ではあまり観られないものである。

3.3 『全』にない要素

本節では日本語の言語行動と比較して『全』では展開されていない言説を考えたい。現代語の日中対照研究において勧誘を断る談話を分析した王源・山本裕子（2015）は次の指摘をする。

「中国人は〈理由〉〈今後への言及〉〈意志表明〉の3つが典型的な要素であるが、日本人はそれに〈詫び〉を加えた4つが典型的な要素として用いられていると言える。」

これを踏まえて『全』をみた場合、辞去者の言説に〈詫び〉の要素は含まれない。また杉村孝夫（2012）の枠組みと比較すると、以下の要素が『全』の辞去の場面には観られない。

〈家族への伝言〉「お父様に宜しくお伝え下さい」

〈帰途の注意〉「帰り道には気をつけて」

〈訪問への謝辞〉「ごちそうになりました」「お邪魔しました」

〈待遇の詫び〉「お構いもしませんで」

その一方で、『全』には日本語にない要素もある。それは送り手による〈辞去の容認〉である。例えば辞去者発話の“我也不坐着了”に対し、“您不坐着了”と応じる場面は日本語の対話では些か不自然である。日本語に訳すと「じゃあ帰りますね」に対して「帰るんですね」と応じる形になる

が、この対話は現代日本語では特別なニュアンスを帯びる。敢えて言えば、送り手が「帰るんですね」と言った場合、辞去への否定的な気持ちを表明することにもなるが、こうした場面はあまり観られない。

こうした現代日本語との比較において、日本語世界で展開されるやりとりが『全』に存在しない、逆に日本語にはない表現が『全』に存在する状況は、『全』の辞去場面には日本語からの転移があまり観られないことを示唆する。

おわりに

本稿では『全』における辞去の場面でどのような言語戦略が採用されているのかを観てきた。その結果、辞去者が辞去を伝える行動に対し、送り手は引き留める言語行動をとり、さらに辞去者は辞去の理由を具体的に述べ、次に会う約束を明示するというやりとりが展開されることを論じた。こうした辞去の言説は「断り」のストラテジーと類似した戦略と言える。

辞去場面でのやりとりは日本語と中国語の間で共通する要素も多いものの、異なる要素もまた存在する。中国語の発話の特徴は、送り手の辞去を容認する発言をしたり、辞去の行動自体を言語化することにある。

そして現代日本語ではしばしば送り手による「来訪への感謝」や辞去者による「対応への感謝」が述べられる。例えば、辞去者の「ご馳走になりました」や、送り手からの「ご足労頂きましてありがとうございます」といったものである。「大したお構いもしませんで」といった送り手による「応接への詫び」といった謙遜の表現や感謝の表現が、『全』の辞去場面で全く言及されていない。

では辞去場面に限らず、『全』をみた場合、日本語からの転移がどの程度観られるのかを考えてみたい。本稿の冒頭でも言及したが、『全』の他の官話資料や白話資料にない大きな特徴として、“您”が“你”よりもずっと多く使われていることが挙げられる。日本語を母語とし、かつ丁寧な話し言

葉の使用を半ば義務づけられる立場にあった外交官にとって、そもそも当時の中国語に“您”と“你”の使い分けがあるにも関わらず、目上に対して“您”を使わなかったならば、編者としてそのことに違和感を抱いた可能性は十分あったと推察される。しかし、『全』の辞去場面では、日本語からの転移はそれほど強く観られないという結果が支持されている。この状況は矛盾するように見える。だが、『全』が大部な分量に比して内部差異が比較的小さい資料であることは、編集の段階で内容の整理が行われたと考えられ、その過程で“你”よりも“您”を使うといった手を加えやすい変更は容易に実現可能だったと推察される。だが文や談話単位までは日本語の言語習慣からの具体的な介入が及ばなかったのではないかと推察される。

注

- 1) 山崎直樹（2005）を参照。
- 2) 日本語を母語とする中国語学習者が自己紹介の末尾に“请多关照”を加えてしまう、また「先日はどうも」、「この間はお世話になりました」といった「後日の再感謝」を中国語に翻訳した形で述べてしまうことも日本語から中国語への語用論的転移である。
- 3) 本野英一（2009：17. fn. 48）によると深澤は1915年に長沙領事代理、『満洲日日新聞』1917. 11. 4（大正6）によると、1917年に吉林に副領事として赴任している。『大阪毎日新聞』1919. 8. 8（大正8）によると1919年に汕頭駐在領事から北京公使館二等書記官に転任している。
- 4) 奥村佳代子（2018）は「第171章は、会話の中に登場する“笑話”では、“您們”が1箇所て用いられている。」と指摘する。
- 5) なかには3名による会話もある。
- 6) 第39章に観られるように、次の約束が辞去の場面より前になされる場合、Aによる〈感嘆詞の使用〉や、Bによる〈引き留め〉もなされない。
- 7) Brown and Levinson（1987）
- 8) これはBrown and Levinson（1987）のネガティブ・ストラテジーにおけるストラテジー10「Redress other wants of H's」に相当する。
- 9) なお同じ感嘆詞でも“哎”や“唉”は辞去場面では使用されていない。
- 10) 本エピソードは必ずしも年上と年下が明確ではないが、4に“閣下”という呼

びかけがあることや、33に“我纔託您的事，您千萬在心。”という依頼の念押しがあり、こうした念押しは目上からなされる可能性が高いと判断し、暫定的に偶数番号を年下（目下）、奇数番号を年上（目上）としている。なおこのエピソードでは両者が二人称単数で“您”を使用し、談話内容もかなりの高位の知識人であることが推察される。

- 11) これは依頼の断りに関する言語行動と類似する。
- 12) これは Culpeper (1996) によるインポライトネス・ストラテジーと位置づけられる。

参考文献

- 内田慶市 (2017) 『北京官話全編の研究——付影印・語彙索引』上巻 大阪：遊文舎
- 内田慶市 (2018) 「再び“您”に関わることから」『北京官話全編の研究——付影印・語彙索引』下巻：1-14
- 奥村佳代子 (2018) 「『北京官話全編』における人称代詞」『北京官話全編の研究——付影印・語彙索引』下巻：15-22.
- 國學院大學日本文化研究所 (2005) 『深沢暹関係文書目録』國學院大學日本文化研究所
- 杉村孝夫 (2012) 「辞去の場面の談話分析——大分県方言談話 50 年の変容——」『福岡教育大学紀要. 第 1 分冊, 文科編』61：47-68.
- 本野英一 (2009) 「清末民初における商標権侵害紛争——日中関係を中心に——」『社会経済史学』75 (3)：3-21.
- 蒙楯 (2010) 「日中断りにおけるポライトネス・ストラテジーの一考察——日本人会社員と中国人会社員の比較を通して——」『異文化コミュニケーション研究』22：1-28
- 王源・山本裕子 (2015) 「親しい友人に対する断り行動の日中対照研究」『人文学部研究論集』34：19-35.
- 山崎直樹 (2005) 《篇章結構和礼貌的關係》『中国語普通話文法と方言文法の多様性と普遍性に関する類型論的・認知言語学的研究』（平成 13-16 年度科学研究費補助金基盤研究 B (1) 研究成果報告書, 13410129) 78-87 2005 年 3 月
- Brown & Levinson (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- Culpeper, Jonathan (1996) Towards an anatomy of impoliteness, *Journal of Pragmatics* 25 (1996)：349-367.